

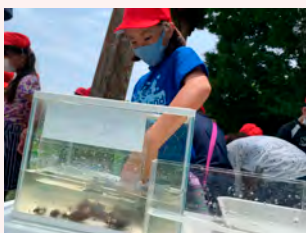
有機米を導入した学校給食や有機米作りを通して学ぶ、農業と食と地域社会と、生物多様性との関わり

千葉県いすみ市

いすみ市は房総半島南部に位置する農林水産業が盛んな地域で、複雑に蛇行する夷隅川^{いすみがわ}中流域の砂泥地は、川と丘陵地から供給される養分を蓄え、良質な米作りに適した田園地帯となっています。いすみ市は、「環境創造型農業」の推進及び自然環境の保全・再生を通じた地域活性化推進のため、平成24（2012）年に農業関係団体や自然環境保全・生物多様性関係の団体など22団体からなる「自然と共生する里づくり協議会」を立ち上げ、その後、平成27（2015）年には「いすみ生物多様性戦略」を策定しました。里山里海の自然資源の保全・再生を土台とし、その上に農林漁業の振興と生物多様性教育及び食農教育の推進の2つをまちづくりの大きな柱として位置付けています。

平成25（2013）年には、行政のイニシアチブにより市を挙げての有機稲作がスタートするなど、名産の米作りでも大きな転換が図られました。その後、平成27（2015）年に学校給食への地元産の有機米の導入が始まり、平成29（2017）年10月には市立の小・中学校給食の全量有機米化を達成しました。それに伴い追加的に生ずる費用は市が負担する形で支援しています。また、有機米の生産・供給を広げるだけでなく、有機米の価値を地域に浸透させたい、理解者（ファン）を増やし、有機米産業を下支えしたいといういすみ市農林課の思いに共感した民間の野生生物研究所とNPO法人いすみライフスタイル研究所の協力を得て、平成28（2016）年から、栄養教育と農業体験と環境学習（有機稲作体験や田んぼの生き物調査など）を一体化させた「教育ファーム」の授業が小学校5年生の「総合的な学習の時間」で実施されています。児童が学校給食で食べている有機米を題材に、生物多様性を支える共生の概念や、農業が里山の生物多様性を保障し、同時に生物多様性が農業を保障していること、里山の歴史と現代に至るまでの変化、近代農業がもたらした正の影響と負の影響、自然と共生する環境保全型農業が注目されている理由などを学びます。

令和2（2020）年3月には、「教育ファーム」の授業で活用できるよう「いすみの田んぼと里山と生物多様性」が発行されました。田んぼが持つ多面的機能や環境の大切さについて児童が体験を通して学ぶことができるよう、児童自身に考えてもらう問題提起型の内容となっています。さらに、教育ファームに関わった小学校の先生等によって「100年変わらないもの探し」というプログラムが作成されました。100年前から変わらず自分たちが住む地域に残っているものについて考え（探しに行き）、なぜ残っているかその理由について意見を出し合い、その上で100年後に残っていてほしいものが何かについて考えるものです。100年前のことを考えることは自ずと100年後にどうしたいかを考えることにつながり、地域の農業をどうしていきたいかにも関わります。今後も「教育ファーム」の取組を広げるとともに、内容の拡充を図っていきます。



田んぼの生き物調査の様子



有機稲作体験の様子



座学での説明